

Title	理財学会秋季大会
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.12 (1924. 12) ,p.1849(167)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241201-0167">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241201-0167</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

七

以上に於て余は現實科學の立場よりすれば公共性を以て銀行業の定義の第一要素に數へなければならぬ事を明かにしたのであるが、然し此公共性なるものは之を國有の如き事と混同してはならない。即ち銀行業が公共的でなければならぬと云ふ事は、銀行業が國有とされなければならぬと云ふ事を意味するものではない。これ銀行業の公共性とは銀行業が可能ならしめる所の金融作用を最も良く指導して完全なるものにする事を意味するものであつて、單に金融作用を可能ならしめる銀行業の主體が私人たること私人たることを問はないからである。銀行業の主體が私人から公人に移つた處で肝心の金融作用の指導が拙であるならば何の役にも立たないのである。要は如何にして金融作用の指導を一層良く行ふ可きかである。此のためには銀行組織

の改善も必要であらう。銀行貸出政策の改善も必要であらう。中央銀行の兌換制度並に割引政策の改善も必要であらう。然しその根本的の要件は銀行業者の自覺である。從來の如く銀行業者が一にも二にも利益を標準にして銀行業を經營して行くのでは、何時まで経つても金融作用の完全なる指導は之を望まれない。勿論利益を求めざる事は悪い事ではないが、之を銀行業經營の標準とするのが悪いのである。銀行業經營の眞の標準は、一國生産物の増加を計ると共にその生産物の公平なる分配を可能ならしめる可き點にある。換言すれば經濟界の指導にある。斯る經濟界指導の結果として報酬を收得する事は差支へはないが、斯る報酬の如何を標準として銀行業を經營してはならない。元來銀行業なるものは合理的な理詰な業務であるが故に、利益を主としないで統計的に報酬本位で經營出来る

可きものと信ずる。例へば銀行は經費並に重役の報酬に預金の原價を加へたるものより算定して貸出利率を決定し、以て銀行經營をなして行く事も出来るものである。勿論貸倒れの危険はあるであらうが、これも統計をとつて經費の中に算入すれば良いであらう。資金の需給關係が金利に及ぼす影響は、大體預金原價の算定を種々に變更する事に依て充分之を考慮する事が出来ると思ふ。

斯くの如くして銀行業が從來の如き利益本位の立場からして報酬本位の立場に變り、財界指導を以て根本の標準とするに至らんか、恐らく從來の如き放漫なる貸出過度の警戒や無謀なる放資に依て金融界の硬塞を來し金融作用の圓滑を害する様なことはなくなるであらう。また現に銀行業の集中、銀行業の大經營化は益々銀行業の斯る公共的色彩を高めつゝあるを見受ける

ではないか。(大正十三年十月一日)

雜 報

- 理財學會秋季大會 十一月六日午後二時より三十二番教室に於て開催演題左の如し
- 佛蘭西學派の經濟學 增井幸雄氏
- 一雜感 及川恒忠氏
- 一日支貿易關係に就て 小村俊三郎氏
- 閉會後萬來舍に於て晚餐會を催し午後八時半散會す、出席者左の如し
- 小村俊三郎氏 堀江先生 增井先生
- 三年幹事 夏目
- 二年幹事 檜原 後藤 濱谷
- 一年幹事 奥田 平野 田中 寺本